

阪田知樹さん(ピアノ)

日本フィルハーモニー交響楽団

第337回横浜定期演奏会

2018年5月12日(土) 18:00
横浜みなとみらいホール



写真提供: (公財)相模原市民文化財団
©Michiharu Okubo

(翌5月13日(日)に同プログラム・同出演者に開催された「第11回相模原定期演奏会(於:相模女子大学グリーンホール)」時の写真



◆プログラム

ワーグナー: 楽劇<トリスタンとイゾルデ>より
前奏曲と愛の死
シューマン: ピアノ協奏曲 イ短調 op.54
チャイコフスキー: 交響曲第4番 ヘ短調 op.36

阪田知樹さん(ピアノ)
日本フィルハーモニー交響楽団
指揮: アレクサンドル・ラザレフ



写真提供: (公財)相模原市民文化財団
©Michiharu Okubo

(翌5月13日(日)に同プログラム・同出演者に開催された「第11回相模原定期演奏会(於:相模女子大学グリーンホール)」時の写真

シューマンが遺した唯一つのピアノ協奏曲。阪田さんが、数あるピアノ協奏曲の中で最も詩的な、そして希望、憂い、情熱、嘆きなど相反する感情が盛り込まれている人間的な作品の一つという曲。

シューマンらしい美しい旋律。それが透き通ったピアノの音に乗って伝わってくる。つながりきらきらと輝く宝石のよう。ピアノとオーケストラの語り合いを聴いていると、ふとシューマンとクララが会話をしている場面が浮かんで来た。こんなことを感じ、想像し、不思議な雰囲気にも包まれる。これが音楽の持つ力、コンサートに足を運ぶ魅力の一つかもしれない。

Q&A

私が普段疑問に思っている素人の質問にも、とても丁寧に時間を掛けて答えてくださいました。阪田さんの回答を読むと、本当に音楽が好きなんだなあ、と微笑みが浮かびます。また、阪田さんの素顔も垣間見ることができます。是非、ご一読ください♪

Q1. シューマンが残したただ一つのピアノ協奏曲。この曲は、演奏を通して阪田さんに何を語りかけていますか。阪田さんは何を感じていますか。

A1. この作品は、言葉で表現するのが特に難しい作品だと感じております。と言いますのも、一つの旋律や和音に、希望、憂い、情熱、嘆き、など相反する感情表現が盛り込まれているからです。

敢えて申し上げるとするならば、数あるピアノ協奏曲の中で最も詩的な、そして、人間的な作品の一つなのでは、と思います。

Q2. シューマンは、メンデルスゾーン、ショパン、リスト、ワーグナーと同時代を生き、同じドイツおよび周辺国で活躍しましたが、この時代、この地域はこういった作曲家にどのような影響を与えたのでしょうか。また、シューマンはどういった個性の持ち主だったのでしょうか。

A2. 当時は、今ほど交通機関などが発達していなかったにも関わらず、音楽家同士の交流が盛んでした。シューマンは、非常に同時代の作曲家の作品に敏感に反応していました。

事実、シューマンが、メンデルスゾーンのピアノ協奏曲を聴いていなかったら、シューマンは、ピアノと管弦楽の為の幻想曲(のちのピアノ協奏曲の第1楽章)に後続の2つの楽章を書いていなかったのかもしれない。



写真提供：(公財)相模原市民文化財団
©Michiharu Okubo

(翌5月13日(日)に同プログラム・同出演者にて開催された「第11回相模原定期演奏会(於:相模女子大学グリーンホール)」時の写真

シューマンの音楽は、同時代の作品や音楽史全体の中でも、最もパーソナルな音楽だと思います。感受性が豊かで、非常に繊細な…しかし弱々しいという意味ではなく寧ろ感情の振れ幅が非常に大きい…音楽が人の心を打つのだと思います。

シューマンが尊敬していたドイツの作曲家、ベートーヴェンの作品(特に後期作品)にもそのような特徴があります。ベートーヴェンの死後、ドイツ生まれの作曲家達は、直接的でなくてもベートーヴェンから多大な影響を受け、自身の音楽を模索していました。

たとえ全く異なる世界観を持っていてもシューベルト、シューマン、リスト、ブラームス、ワーグナー、マーラー…などといったドイツ(或はオーストリア)の作曲家達は、皆ベートーヴェンという広大な大地に根を張っているのです。

Q3. 阪田さんは国際的に活躍できるような演奏家になりたいと常々語り、その通り国内外を忙しく飛び回って演奏をせっせとやっています。これまで続けて来られて、成果を残せてきた理由は何だと思えますか。また、今後も続けていくために何をしたいとお考えですか。

A3. 実際に成果を残せてきたかどうかはわかりませんが、少なくとも一年ごとに異なった課題を自身に課して、とにかく信じることに、そして、自身の感覚に正直に、共感できることはすぐ実行することに専念してきました。

たとえ小さな一歩であっても、総合的に前進することを優先してチャレンジするようにしています。

今後も信念を持ちつつ、前向きなチャレンジを続け、自身の視野を広げるべく様々な方面(言語、歴史、美術など)からも、更に勉強を続けて参りたいと思います。

Q4. ご自身を他のピアニストと差別化するとすると、どんな点でしょうか。

A4. 他の音楽家の方々との比較を特別したことはないのではっきりとはわからないのですが、演奏するとき、或は作曲するとき、常に明確なヴィジョンをもって自分自身が納得する音楽を追求することを特に心掛けております。その結果生まれたものが他の方々と異なることがあるということなのだと思います。

クラシック音楽の根源を考えれば、勿論、共通項はあって然るべきですが、意識的に奇をてらうということが個性かという、また違うのではないかと考えています。

Q5. 阪田さんを見ていると、どんな時も常に全力投球のように見えるのですが、息抜きや気分転換が必要な時はありませんか。そんな時は何をされますか。

A5. 息抜きというか、気分転換はとても上手な方だと思います。というのは、常にやる気を持って取り組んでいたい方なのですが、同時にいつも休憩もこまめに取っているのです。(笑) 何事をするときも、心身が疲れてしまうと良い仕事はできないので。

勿論、スケジュールが立て込んでいるときもありますが、それでも、ゆとりを持てるように合間を利用して休んでいます！

単に転がったり、映画などを見たり。あと、お気に入りの演奏家のCDなどを聴きながら、美味しいものを食べてリラックスしたり、好きな本を読んだり、完全なインドア派ですね。(笑) 自分のペースでゆっくり森を散歩するのも好きです！



(阪田さんが散歩をし、時にはインスピレーションが湧くという森
阪田さんご提供)



(阪田さんが学ぶハノーファー音楽演劇メディア大学院
阪田さんご提供)

Q6. 音楽に素人の質問で大変恐縮ですが、以前から疑問に思っていたことがあります。大学院でのプレゼンの授業とはどんな授業なのでしょう。テーマは例を挙げるとどんなものですか。ピアノを使いながらプレゼンをするのでしょうか。その授業を通してどんなことを得ていますか。

A6. 基本的には楽曲の分析・解釈をし、その補足資料などをあらかじめ準備して作成します。資料や取り上げた題材の楽譜などを担当教員・アシスタントも含め学生全員に配布して、プレゼンを始めます。

テーマはそれぞれですが、例えば、これまでに私がプレゼンをおこなったものにはイタリアの現代音楽作曲家、ルチアーノ・ベリオの作品などがあります。楽譜を使っていますので、特にピアノで実践しなくても分かるところは省略しますが、必要に応じて、ピアノで実際に音を出しながら説明ということもあります。

演奏をするという行為は、解釈を伝えることでもあるので、これは普段から演奏する前にいつも当たり前のようにしていることなのですが、これらを他人にも分かるような言葉で明文化したり、実際に口に出して説明することにより、よりクリアなマインドでその楽曲に向かうことができると思いました。

質問も活発なので、他の意見を聞くこともできますし、自分では当たり前と思っていることが実はとてもユニークだったりするということを自覚させられたりと、良い刺激になっていると感じています。

Q7. 阪田さんの素顔に迫りたいと思います。一番幸せだなあと思う時はどんな時ですか。自分を一番元気づけてくれるモノ(人、食べ物、言葉等)は何ですか。

A7. 本当に素晴らしい音楽に出会えた瞬間ですね！何とも言えない音で、言葉では表現できないような美しい音楽が奏でられているのを聴くことができたり、楽譜からそれが読み取れたりする瞬間は何事にも代えがたい幸せを感じます。

このような素晴らしい音楽が存在して、これまで生きてきてくれて、「ありがとう」と、感謝の思いで満たされます。このような音楽に出会えると、小さな悩みなど吹き飛ばしてしまいます。

他には美味しい食事を頂く時もそのように感じるがありますね！(笑) 随分前ですが、香港で頂いたチャーハンが、味わったことのないほどの美味しさでした！！



子どもの頃先生に「人間百科事典」と言われたという阪田さん。知的好奇心の塊のよう。素晴らしい演奏の裏には、分析、解釈、研究、意見交換など周到な準備があるのだと改めて知った。だからこそ聴く人の心に響く音楽を奏でることができるのだろう。素晴らしい音楽に「これまで生きてくれてありがとう！」と言う心優しい阪田さん。そういう音楽をこれからもたくさん、聴衆にも届けてほしい♪